

続

松本清張の世界

—その人生と文学—

田村 栄



続

松本清張
の
界

田村
栄

光和堂

田村 栄 (たむら・さかえ)

一九一九年東京南千住に生まる。
三三年慶応商工一年生のとき慶大の「映画芸術研究会」に入る。三三年映画監督五所平之助を中心とする「スタジオ・F社」結成に参加し、映画芸術を学ぶ。
四二年病氣療養のため慶大日本史学科を中退。一〇年の療養生活中「アララギ」に属し短歌に熱中する。戦後学校教師、私塾経営等の傍ら近現代日本文学の研究に携わる。一九八一年四月脳内出血で倒れたが不屈の訓練により左手で書き「一歩一歩の記」「春の別れ」等の作品を発表。九一年一〇月八日没。
主要著書『石川啄木』『胸の中の泉(歌集)』『松本清張―その人生と文学―正・続(旧版)』『新田次郎』

続松本清張の世界

―その人生と文学―

一九九三年六月十五日

一九九三年六月二十五日

印刷
発行

著者 田村 栄

発行者 草鹿直太郎

印刷所 第二整版

発行所 (株)光和堂

〒170 東京都豊島区西巢鴨一―一五―四
電話〇三―三九一八―四二―一 振替(東京)一六八四一四

＊定価はカバーに表示してあります。

© FUMIE TAMURA 1993
ISBN 4-87538-101-8 C0095
Printed in Japan.

続 松本清張の世界 — その人生と文学 — 目次

1	現代学者気質 俗物批判の系譜……………	7
	「石の骨」 8 「落差」 11 「地の骨」 27	
2	政治の中の人間 権力の性格……………	37
	硬質文学の傑作「北の詩人」 38 「象徴の設計」 52	
3	江戸の万華鏡 歴史小説と伝奇時代小説との間……………	67
	「文学大衆化」についての若干の歴史的考察 68 本格的時代小説「かげろう絵図」 91 最大の長編「天保図録」 109	
4	現代史を斬る 日本軍国主義の爪あと……………	149
	——「昭和史発掘」の種々相——	
	「二・二六事件」の底流 150 二・二六事件 187	
	〈座談会〉 松本清張・人生と文学を大いに語る……………	205
	文学は大したものじゃない 207 創作と評論 214 文学へのめばえ 216	

宿命と人間の営為	219	女性像・恋愛観	223	アカデミズムへの疑問
227 系統主義・権威主義・血統主義	236	創作への情熱	240	仕事の
捌き方	243	古代史・現代史のおもしろさ	244	何でそんな無理をする
のか	248	「日本の黒い霧」「深層海流」の裏話	250	知的な趣味の大切
さ	252	天皇制の消滅は間近い	254	ロッキード問題
262	264	学問遍歴	264	「清張通
史」への期待	262			

あとがき.....

装幀 渡辺 皓司
写真 蔵原 輝人

続 松本清張の世界

—その人生と文学—

1 現代学者気質 俗物批判の系譜

私は本書を「正編」から引きつづいて、それ程厳密ではないがほぼ「年代順」をたどりながら、それぞれの章がなるべく「テーマ別」のまとまりを持ち得るような方法を併用してきた。年代順の意味からは既にふれているべき作品であるのに、テーマ別との関係からまだふれずにいる作品もある。「天保図録」(一九六二・四一六四・一二)と一括すべき性質を持つ「かげろう絵図」(一九五八・五―五九・一〇)などもその一つである。

そこで私は、年代順からはいくらかとびとびになるが、本章では、松本の学者・学閥への批判や、私学の経営問題を剔抉(てきけつ)する意図を持ついくつかの作品にふれてみたい。松本がこの種の問題をとりあげているのは、ずっと後年の、後者では「混声の森」(一九六七)、前者では「火の路」(一九七三)等をふくめて少なくともないが、ここでは主として年代的に比較的近い位置にある「落差」(一九六一年、『読売新聞』)と「地の骨」(一九六四年、『週刊新潮』)とを取り上げることとする。

ところで、既に初期作品群を扱った「正編」において、私が愛着をこめて集中的にふれた「断碑」「真贋の森」「カルネアデスの舟板」「石の骨」等はいずれも、学閥の問題を取り上げており、

特に「断碑」「石の骨」は、在野の学者が官学に拠る学者たちから阻害され、締め出されて行く不合理に対して痛烈にプロテストする作品であった。埋もれた才能を惜しみ、学問の公正な評価を切に望む松本の思いは、作家松本の最も深いモチーフを形成していたから、特に「断碑」では、それが深い人間ドラマの傑作たらしめる働きを持った。「石の骨」は作品としては肉付け不足で、人間ドラマとしての感銘が「断碑」に及ばないことは私も既にのべたが、官学の閉鎖性という問題を扱った作品としては、「石の骨」は「断碑」よりもいっそう解り易く、事実に即して語られている。この点から、「落差」「地の骨」を語る前に、もう一度短篇「石の骨」(一九五五)に眼を向けてみよう。

「石の骨」

この作品について、松本は『全集』第三十五巻の「あとがき」で次のようにのべている。

『「石の骨」』は、日本にも旧石器時代があると以前から主張してやまなかつた考古学者直良信夫氏がモデルである。直良氏は、いわゆる明石原人を発見した人だが、不幸にも発見した人骨は戦災で焼いてしまい、今日ではその石膏型が東大に残っているだけである。直良氏くらい、迫害と悪口と冷笑のなかに過してきた考古学者も珍しい。ここにも考古学界におけるアカデミズムと在野の間の相剋があるが、森本氏(「断碑」のモデル)とは別な意味で私は直良氏に惹か

れていた。直良氏は恵まれない学界の環境に置かれて悪戦苦闘されたが、今日の考古学はすでに日本にも無土器文化時代があったのを承認して、直良氏の業績を認めざるを得なくなっている。氏のために喜びにたえない。」

松本の意図は以上によって明らかであろう。

さて、「正編」では簡単にしかふれ得なかった作品「石の骨」は、地方の中学校教師黒津の一人称による物語の形式をとっている。作中の「己」は、強風下の荒浪で土砂崩れを起こした海浜の崖の土壁から、化石人の腰骨片を発見する。洪積層最下部の青粘土の中に露出採取された人骨は、以前、既にこの地点から旧象の化石と打製石器を採取していた黒津には、正に旧石器時代人の人骨を証するものと思われた。だが、黒津が鑑定を依頼したT大人類学教室の岡崎博士は、有望との観測を伝えていたのに、突然、発掘したのでなく拾ったものにすぎないからという理由で認定を拒み、人骨は送り返されて来た。後に黒津にも伝わって来た真の理由は、或る日、岡崎研究室にふらりと現われた岡崎の恩師竹中博士が次のようにつぶやいたことだったのである。

「どうも田舎の中学校の先生などが知ったかぶりで詰らんことを書くから困るね。君、日本に旧石器時代があったなどという大問題がそんな人に簡単に分って堪るものかね。そんな標本なんかいい加減なものだよ。」

岡崎は恩師の意向に逆らってまで鑑定の作業を進めることができなかった。竹中の言葉にふくまれている姿勢には、真理に対する一片の畏れもなく、そこにあるのはただ、自己の閉鎖的な權威の保持への俗物的な願望のみであり、明らかに学問的粉飾の陰に隠れた傲慢と高圧なのであった。それは教養や学問があろうとなかろうと、最も下劣な品性の現われと言わなければならない。黒津は自己の発見した人骨の画期的な意義を疑わなかったが、その貴重な資料は東京の空襲で焼失してしまう。どんな学説も証拠の資料なしには説得力を持たない。黒津は独力で旧石器時代の人骨発掘を目ざさなければならなかった。その結果、生活は窮迫し、妻子は榮養失調を宣告されるようにさえなったが、それでも黒津は、研究と発掘とを手離さなかった。

黒津の妻が「石の骨」と呼んだその人骨は、幸いにも岡崎博士の手で石膏型にとられていて、それに着目した同じ大学の水田博士が、突然、黒津に発見状況をくわしく聞きたいと言って来た。やがて、黒津の説明に基づいた水田博士の論文が発表され、「石の骨」は末尾に「ミズタ」の名を持つ旧石器時代人骨として命名された。しかし、真の発見者黒津の名はそこにはない。それだけではなく、人骨の発見された土地の発掘に当たっても、黒津はオブザーヴァーとして現地の作業を見学することしか許されなかった。しかもそのうえに、その発掘そのものが、水田論文に反感を持つ人びとが、発掘の失敗を予測し、水田説を傷つけるために、水田をそそのかして実施させたのだというのである。作者はここで、作中の黒津に次のようにつぶやかせている。

「己はそれを聞いたとき、人間の信頼の喪失に身慄いする思いがした。この裏に裏のあるような学界の一部の複雑と煩わしさに、安心できるものは何もないと直覚した。」

この、人間社会を決して甘くバラ色には眺めず、その上で、それをそうさせている人間の卑小さ、俗物性に対して、いささかどぎついまでの憤りをぶつけている直情の態度こそ、松本文学の基本的性格の一つなのである。

「落差」

「落差」は、作中で助教から教授に昇進する一人の利け者の歴史学者の行動を通して、或る種の学者なるものの陋劣ろうれつとしか言いようのない人間像を鮮明に浮かび上がらせると同時に、文部省の検定をめぐって、教科書の編者である学者と教科書会社との間に取り交される駆け引き、教科書売り込みと地方の教師たちとの腐敗した関係等を描くことを中心的なテーマとした作品である。

この作品は最後に傷害事件をふくんではいるが、犯罪を解明し、犯人を推理して行く過程を描くものが推理小説だとしたら、これはその意味の推理小説ではない。一つの犯罪がどのような理由の積み重ねの中から起こって来たかを克明に描いている点で、これも一種の「推理小説と言っ

てよい」と『全集』第二十巻解説で鶴見俊輔が書いているが、もし、そこまで「推理小説」の概念を広げるのなら、犯罪の有る無しにかかわらず、すべての小説は推理小説と呼び得ることになりはしないか。すべての小説は何等かの事件と人間とのかかわりを、その必然性において描き込もうとするものだからである。木々高太郎の最初の規定よりは狭くなるけれども、私はやはり、推理小説とは犯罪に対する「謎解きまたはアリバイ崩しを主眼とする小説」と考えたい。「落差」はその意味での推理小説ではなく、普通の意味の説得力ある人間ドラマである。

国立C大学助教授島地章吾は、秀学図書から出されている社会科教科書の編纂者であり、古代史研究への民俗学の取り入れを巧みとするユニークな歴史学者として知られている。島地は弁も立つし、随筆も巧みにこなすジャーナリズムの売れっ子で、学校から受け取る俸給など今や彼にとっては物の数でない。学内で、なぜ彼が助教授でありながら教授そのものの実力者たり得るのかについては、深い叙述はないが、物語の後半で島地は教授に昇進し、得意の絶頂を極める。

島地は講演旅行や教科書会社の編集会議などでよく地方に出かけるが、その際は必ずその地の女と懇ろになると言われている。学者のマナーを身につけた色事師でもあるのだ。

この物語は、一九五〇年代の後半からそれが執筆された一九六一年までのいずれかの年を舞台とするが、小・中学校用の社会科教科書を数多く執筆して来た島地にとって、いつか、時代はベソンの自由を奪う反動の時代への転換を開始し、時とともにその勢いを加えつつあった。一九五六年十月、文部省に教科書調査官の制度が布かれ、実質的に検定審査の実権が官僚の支配下に置か

れて以後、執筆者の学問的良心に対する生殺与奪の権はまぎれもなく文部官僚の手に握られたのである。

この、省令改正による教科書調査官の任命は、その前年に当たる昭和三十年（一九五五）の第二十二通常国会の行政監察特別委員会において「へソ連・中国を徒らに礼讃する偏向教育」なる問題が論議され、その結果、与党自民党（作中では「民主党」とされている）が「うれうべき教科書の問題」なるパンフレットを発行したとと密接に関連していた。

教科書の検定は、文部省規則による「教科用図書審議会」の答申に基づき、文部大臣が行なうのであるが、「うれうべき教科書の問題」直後、審議会委員の入れ替えが行なわれ、それまでの慣行に反して、調査員の評点が「合格」でも、審議会が「偏向」と認めれば不合格とするように審議会の運営が改められた。五人の委員の名前は発表されず、ABCDEの符号で扱われたが、「偏向」の指摘はほとんど「F」氏によってなされたので、当時、ジャーナリズムは「F項ページ」と呼んでこれをにぎやかに論評した。

教科書出版会社は、教科書売り良くするために、F項ページにひっかかった「好ましくならざる」筆者への依頼を敬遠した。F項ページは左翼的執筆者から次第に中立的執筆者にまで及ぶ形勢だったため、節操のあやふやな執筆者の中からは次々に審議会の保守的・反動的意向に迎合する者が現われた。教科書会社の利害と執筆者の保身とは、相乗作用となって、教科書の内容から、進歩的・人民的要素を駆逐する勢を示した。

島地章吾もまた自己の利害と保身のために、この点で迎合的転進を図った学者の一人である。

(この、時代への迎合と思想転向の問題は、短篇「カルネアデスの舟板」(一九五七)で、松本がすでに痛切に扱った問題である)。

島地は、戦時中「大政翼賛会」に所属し、周囲の学者たちからは、恩師の国家主義的な学説に追随しているものとみなされていた。しかし、彼はまだ若かったので、それほどはつきりとした自説を打ち出していただけでもなかったのだ。戦後は、その学説の不明確さが幸いして、彼がにわかにな唯物史観を踏まえた論文を発表し出しても、人々は深く怪しまなかった。その結果、七、八年前までは、戦後の民主主義思想の高揚期に棹さして進歩的学説を書きまくった一群の学者たちの中に、彼自身もふくまれていたのである。しかし、今や時代は転換したのだ。島地は人知れず、もう一度反動化の時代に順応する思想への転進を決意していた。しかも、この再度の転向はできるだけ隠微に、「進歩的」という仮面のはがれ落ちない形で行なわれなければならないのである。誰にせよ、どうして教科書の編集名義人というような豊かな収入源を手離すことができようか。黙って適当に時流に迎合し、マスコミの売れっ子たることによってこそ、彼の学内での羽振りの良さも保たれると言うものではないか。

作中しばしば教科書会社の幹部たちの島地への阿諛あつちやうの姿態が描かれるが、島地は次第に図々しくなり、温泉地などで編集会議が開かれたりすれば、密かに自分が同伴した女の宿泊費まで会社の付けに回す始末となる。島地はさらに、今度改訂される「中学社会科」の編集名義人を引きつ